

職員が学生FDを牽引し 授業を変え、学内を活性化

京都文教大学

京都文教大学の学生FDは、一職員の自主的な取り組みをきっかけに始まった。

他の教職員を巻き込みながら発展してきたこの活動は、

授業の教育効果を高めるとともに、学内に活気をもたらしている。

学生が成長する喜びを原動力に、積極的に支援に関わる職員の姿勢が

周囲の職員にも影響を与えつつある。

職員のサポートを得て 学生FDが授業を運営

学生FDとは、学生と教職員が協働して大学教育を改善する活動のことだ。一般的に教員が主導することが多いが、京都文教大学の学生FD「FSDプロジェクト」は、教務部教務課の村山孝道課長が設立のきっかけをつくり、活動をリードしてきた。

FSDは「Faculty Staff & Student Development」の略。教員、職員、学生の別なく、大学をよくするためにやりたいこと、やれることを自主的に行う有志の集団だ。なるべく多くの人に関わってもらおうとメンバーは固定せ

ず、個別の活動に参加したい人がその都度参加する形式を採る。週1回のミーティング参加者は学生を中心に約10人、活動内容を共有するメーリングリスト登録者は約60人となっている。

FSDプロジェクトの活動には、活動広報誌の作成、他大学の学生FDとの交流、国際交流イベントの企画などがあるが、柱は、1年次春学期必修の自校教育科目「大学入門」を企画、運営することだ(図表)。授業では、一般学生による各プロジェクトが学内で活躍する様子や、大学で成長した姿を自ら提示する。これによって、1年生に「自分も大学で何かやりたい」という気持ちを起こさせることが目的だ。

授業を聴いて3割超(2014年度)が自治会や大学祭・体育祭の運営団体に加入する。また、他のプロジェクトにも多数の新入生が参画を始め、学生の活動を盛り上げるきっかけになっている。授業に関わった職員からも「学生と過ごす時間が新鮮」「この大学に転職してよかった」など、手ごたえを感じる声が続出している。

学生の成長と活性化のため 自主的に活動を開始

FSDプロジェクトの牽引役、村山氏は、1996年度の入学時からの職員だ。当初は「新たな大学をつくらう」というエネルギーにキャンパス全体が満ちあふれていたが、一通りの制度が整った2000年頃から学内に沈滞ムードが漂い始めたという。「学生はただ授業を受けて、友達と話し、帰るだけで、学内に残らない。4年間を漫然と過ごすので、就活の面接で語れることもない。もっと大学のリソースを使いきって、成長してほしいと考えた」。

2005年頃から村山氏は、業務外の自主的な活動として、学生を主役に学内を活性化させる取り組みを企画。近隣の

留学生との交流、ダンスのステージ、スポーツ大会などを、他部署の職員を巻き込んで実現していった。

2009年度の春に、こうした自主的なキャンパス活性化運動の一環として、教員と学生数人と居酒屋で学内の問題点について話し合った際、思いの外盛り上がったという。それがその後も継続的な話し合いとなりFSDプロジェクトへと発展した。

この年に開講した「大学入門」(当時は「京都文教入門」)は、学園長、学長、学部長らが順番に壇上で話すという単調な内容で、学生の評判はかんばしくなかった。村山氏は「学生の意見を聞いてみては」と、当時、同授業の担当者だった平岡聡共通教育担当部長(現学長)に提案。受講を終えた1年生とFSDプロジェクトの上級生と共に授業改革案を話し合い、翌2010年度からFSDプロジェクトが運営するコンテンツが組み込まれることになった。

職員や学生が授業設計に参加することは同大学としても異例だったが、「学園外から招かれた教員、企業から転身した職員がほとんどで、伝統などのしがらみと無縁であり、新しいことをおもしろがる雰囲気があった」(平岡学長)ためか、反対はなかったという。

後輩が熱意を継ぐ一方 拡大に伴う課題も

大学をよくしようという村山氏の熱意は他の職員にも伝播し、FSDプロジェクト以外にも、職員が学生の成長支援に携わる例が生まれている。

2013年度から活動している「SSA

(Super Student Assistant)」は、SAの育成・サポートをするSA上級者の学生で、育成する者とされる者の両者の成長につながっているという。発足に携わった教務課の井出大地氏は、助言を減らし、学生の主体性を引き出すのがポイントだと説く。これにより、学生との信頼関係も強化されるという。

2014年度にスタートした「プロハビョククルーズ」は、PBL形式の授業「プロジェクト科目」の合同発表会をプロデュースする学生有志団体。村山氏の助言を受けた教務課の中村里江子氏を中心となって、前年度は職員が担っていた役割を学生に任せる仕組みを整えた。

FSDプロジェクト、SSA、プロハビョククルーズなどに参加する上澤尚実さん(臨床心理学部4年)は、「職員は、学生同士の話し合いが行き詰まったときに助け船を出してくれる。各活動それぞれに、頼れる職員がいる」と話す。

他の職員を巻き込むコツを、村山氏はこう語る。「抽象的な理念を語るだけではダメ。具体的な仕事に落とし込み、頭を下げて担ってもらい、時に事前学習などの支援をする。学び、汗をかき、手応えを得ると、またやろう、となる。押し付けず、自身にとっての成果を実感してもらうことが大切」。

一方で、同大学の職員による成長支援は曲がり角を迎えてもいる。活動が本格化するにしたがって、「出張までするととなると、本来の業務に差し障る」「勤務時間内に、本来の業務以外で学生に対応するのは後ろめたい」といった理由で、参加しなくなる職員も出てきた。村山氏のような自主活動型



村山孝道氏

だけではなく、一部を業務扱いにする型も検討するなど、職員の関わり方を組織としてどのような形にするかが、今後の課題と言えるだろう。

「職員も教育者として 学生に接すべき」

村山氏は、「学生に教えるのは教員であり、職員は教える存在ではない」という、大学の教職員にありがちな思い込みに疑問を呈する。社会では、親が子に教える、先輩が後輩に教えるなど、誰もが「教える人」であるのが当たり前で、年長者として学生に接する職員が「教えない」のは、むしろ不自然だと述べる。「学生の成長への貢献は、教員、職員を問わず大学で働く者にとって最大のご褒美のはず。教える内容や支援の仕方は教員と違えども、職員も教育者であるべきだと思う」。

2014年度の就任時に「ともいき*」の理念を掲げ、多様な人が混じり合うキャンパスを構想する平岡学長は、「教員以外のいろいろな人の教育力を借りたい。先輩学生や職員は、その主たる担い手と考える」と、村山氏の活動をバックアップしていく方針だ。

図表 「大学入門」内でFSDプロジェクトが企画・運営する授業の例

Bunkyo Menu	学内施設、支援制度、イベント、学生団体など学内にあるさまざまなものを、学生、教員、職員によるプレゼン形式で「広く浅く」紹介する。
プロジェクトPRフェスタ	一般学生によるプロジェクトをいくつか取り上げ、学生が「狭く深く」をコンセプトにその活動を音響、照明、映像などを使って紹介する。
つぶやき授業	学生がスマートフォン等を通じてつぶやいた授業の感想や意見をスクリーンに表示。それに教員が応答しながら進める授業。
公開しゃべり場	約400人の受講生を10人程度のグループに分け、ディスカッションを実施。FSDプロジェクトメンバーや職員がファシリテーションを行う。

※全15コマのうち例年5コマ程度をFSDプロジェクトが担当。上記は2013～2015年度の授業の一部。

*建学の理念である「四弘誓願」(しぐせいがん。仏教にある菩薩の教え)を、「他者の悲しみ(喜び)を自己の悲しみ(喜び)とする心」ととらえ、「自他共生=ともいき」と表現したもの。